

# 旧制高等学校生徒の精神形成史研究

—第一高等学校『校友会雑誌』を手がかりに—

山本 剛

## はじめに

本稿は、第一高等中学校（1894年に第一高等学校と改称、以下、一高）発行の『校友会雑誌』<sup>1</sup>に掲載された主な論文等から、当時の一高生の意識がどのようなものであったかを分析することにより、旧制高校生徒の精神形成史を検討するうえでの基礎的研究とすることを目的としている。この『校友会雑誌』の趣旨ないし役割としては、生徒によって「校友が互に思想を吐露して麗沢の実を効するの機関」（51号）、または、「我同窓が平素懐抱せる思想言行の反映」（47号）とされ、「人若し校友の思想気風の一斑を窺知せんと欲されば、必ず一たびは本誌を採りて之を繙くなるべし」（47号）と記されているように<sup>2</sup>、当時の一高生の思想的傾向を探るにあたっての重要な史料となりうる。

そこで本稿では、『校友会雑誌』が創刊された1890年代から1900年代まで、すなわち明治20年代から明治30年代後半までの時期を対象とする。言うまでもなくこの時期は日清戦争勃発直前から日露戦争直前、いわば資本主義体制の進行と帝国主義への転化、さらに対外膨張政策の推進によるナショナリズムの高揚といった時期である。このような歴史状況のもとで、いわゆる「統制と画一化に覆われた国民教育体制の、ほとんど唯一の別天地」として、「相対的自由を与えられた」、「反体制的エリート」としての旧制高校生が<sup>3</sup>、どのような意識を有していたかについては、近代日本におけるエリート候補生の意識を知ろうと極めて重要な課題である。

この時期に掲載された『校友会雑誌』の論文等から、一高生が社会あるいは学校生活に対してどのような意識をもっており、どのような精神生活を行っていたかを一瞥するのが、本研究ノートの目的である。

## 1、内村鑑三不敬事件

はじめに『校友会雑誌』を検討する前に、1886（明治19）に高等中学校が成立した当時、一高がどのような学校であったかを知るうえで、一高で起きた極めて象徴的な出来事からみておこう。

周知のように、1891（明治24）年1月9日、教育勅語の拝戴式を一高の倫理講堂で行った際<sup>4</sup>、内村鑑三の事件は起きた。ここで事件の経緯や学校の対応、または一高生の認識がどのようなものであったのかについて詳細を述べる余裕はないが、この出来事が「事件」として拡大を見せた背景には、当時の一高生の思想的傾向が関係する<sup>5</sup>。たとえば『校友会雑誌』第3号（1891年1月27日）の雑報欄をみると、「九日、勅語拜戴式を行ふ、（中略一引用者）日本の臣民たるもの誰か感泣せざらんや、獨怪むべし、本校教員内村鑑三氏は敬礼を盡さず、此神聖なる式場を汚せり」と明記しており<sup>6</sup>、激しく内村の「不敬」を責め

るものが生徒の中にいた。加えて、一高の基本方針が、周知のように文部大臣森有礼によって期待された高等中学校における国家主義を基調としており<sup>7</sup>、「国家的精神涵養の対象たらしめんとせしものにして、実に本校教育の真髄を具現せる」とし、「護国旗」が制定（1889年）されたこと、1890（明治23）年には紀元節祝賀式が開始されたこと、または1892（明治25）年には、倫理講堂に田村將軍、菅公の図を掲げたことなどからも<sup>8</sup>、国家主義的精神の象徴を具現化する学校であったことも確認しておこう。さらに、1890（明治23）年10月30日発布の教育勅語によって、生徒の行動様式の基調方針が一層、国家主義的路線へととなったことはいうまでもない。いずれにせよ、高等中学校成立時の1890年代の一高は忠君愛国の観念と態度を養成する教育方針であり、生徒も国家主義的傾向が顕著であった。

## 2、国家的関心の高揚

この時期の『校友会雑誌』（1897（明治30）年）に掲載された論文の傾向を総括して『向陵誌』の「文藝部史」では次のような回顧的講評を述べている<sup>9</sup>。

此当時に於ける論文家の対象とする所は国家に非ずんば学校、或いは風俗の頹廢を慨し或は校風の不振を難ず。されば如何なる題名を掲ぐるも其論歩は最後には此二者の中の何れかに突入するを例とす。（中略—引用者）畢竟するに当時の論者は真面目に絶えず国を憂ひ校を思ひ

このように一高生の主な関心事は、国家および学校の校風にあった。なお、ここで記された校風とは、学校という集団に生ずる気風を意味し、学校の教育目標や教育方針などを生徒が具現化していく過程で生じる文化として捉えられる<sup>10</sup>。また、この時期には、法科大学教授木下広次が一高の教頭に就任し、1888（明治21）年10月1日、3日に行われた「木下広次教頭の就任演説」、および1890（明治23）年2月24日の「寄宿寮自治制の訓示」にあるように寄宿寮に自治制が導入されたことも周知の事実として確認しておこう。この寄宿寮における自治制を契機として、『校友会雑誌』でも寮内における問題が盛り上がったのも1890年代から1900年代である。これ以後、生徒により寮内での生活に関する論も多くなり、それは「校風論」として、いわゆる旧制高校の独自の学校文化を形成していく要因になる。これら『校友会雑誌』に掲載された「校風論」に関しては、この時期の一高生の意識を知るうえで極めて重要なものであるが、紙幅の関係から別の稿で論ずることにし、ここでは一高生の意識が国家主義的な立場で学校のありかたを考えていたことを確認することにとどめておこう。

ただし、この生徒の関心とする校風論は、いうまでもなく校風が、つねに国家を前提としており、国家と学校との「二者」は、実のところ国家「一者」であったとされる点であろう<sup>11</sup>。すなわち、強い国家的関心がそのまま校風を形成し、国家＝学校として、国体精神の理想が校風として賞賛されていたのである。『校友会雑誌』に掲載された論文の内容を

みても、校風論を論じる生徒の意識として、明確に「我ガ第一高等中学校ハ純ラ国家主義ノ学校ナリ大ハ其ノ教授法諸典式ヨリ小ハ教員生徒ノ挙動ニ至ルマデトシテ国家主義ニ基カザルハナシ校長教員モトヨリ其ノ主義ナリ生徒亦此ノ主義ナリ」と述べている<sup>12</sup>。また、「學術を修養すとともに我神州の国是を把持し」、「国家の觀念を経とし、忠君の大綱を緯」とするものを「名づけて校風と云ふ」<sup>13</sup>。あるいは、「今夫れ学校は猶国の如きなり（中略—引用者）、我校風は神州正大の気の模を小にして爰に寓せる者なり」<sup>14</sup>等とあるように、生徒の主張する校風論とは、そのまま国家主義的思想の発露を意味している。したがって、こうした生徒たちの意識のなかでは、先に述べたように内村鑑三に対する反発・批判は当然であったといえる。

続いて、この時期は、日清戦争を間近に控えて専ら「富国強兵」が国是として指向されていた時期に重なる。それでは、そうした社会情勢のなかで、一高生はどのような意識をもっていたのだろうか。すなわち、日清戦争を一高生はどのようにとらえていたのかという関心から、この時期の『校友会雑誌』に掲載された主なものをみてみよう。

### 3、日清戦争時の一高生

周知のように、日清戦争にむけて、1893（明治26）年2月に「在廷ノ臣僚及帝国議會ノ各員ニ告グ」の詔書が出された。それにより、軍備拡張を目的として内廷費毎年30万円ずつ6年間下付、同期間中は文武官の俸給一割を納入させ、製艦費補助に宛てることが命ぜられる。この詔書に対する一高生の反応が『校友会雑誌』の「勤儉尚武」第33号（1894年1月27日）に記されている<sup>15</sup>。生徒たちは、日清戦争にむけて、「勤儉尚武」を唱えて、いかに積極的に国家に報いるかを議論した。その様子は次のようであった。すなわち、ある生徒が、「思ふに勤儉尚武の事たる之を道德上一個の学説として世に流布せることは既にひさしかるべし、しかれどもこれを勅語として吾人が拜受してよりは未だ半歳の余りに出でざるなり而して今や世人が之に対するの感想は如何、之を實際に施行せる形跡は如何」と、今こそ国家に報いるにはどうすべきかと問うと、先の詔書に対して、次のような意見が出た。これは長くなるが当時の生徒の様子を伝えるためにそのまま引用してみよう。すなわち、「当時吾校にありても之が詔勅を拜讀するや同情を表するに躊躇せず、忽ち疊大の広告は揭示場に貼出され、満校の耳目を聳動するや、各組より委員を選出して如何にして聖旨に副ふべきかにつき協議する所あり、或は勤儉尚武の大額を校内に掲置し、此四字をして常に吾人が眼貌に触れしめ、一事一行皆此意を奉ぜしむべきを努めしめよと曰ふあり、或は喫烟間食の費を省きて其意を致さんと言ふあり、或いは應分の金額を献上し、製艦費中に加ふべしと説くあり、（中略—引用者）、節約の結果若し餘資あらば新刊の書を求めて、新智を啓發することに意を致すべし、豈に必ずしも現実の金錢を献上することを要せんやと」。このように生徒からは、実際に製艦費のための寄付しようとする意見まで出てきたのである。こうした議論の後、「其論ずる所、広狹高卑の差ありと雖も、勤儉尚武の実跡を挙げて以て優渥なる聖恩に酬みんとするに至ては即ち一なり」として、協議の末、御影の前で表誠式を行ない一同の盟約をなしたと、その様子を伝えている。

このような生徒の様子からもわかるように、一高生の代表的な意識としては、日清戦争にむかって賛同していたことが窺える。さらに日清戦争時の一高生の思想を、1894（明治27）年から、1897（明治30）年頃までの『校友会雑誌』の内容から分析すると、見事なまでに国家的関心一色で彩られた感を呈している<sup>16</sup>。すなわち、結論からいえば日清戦争がナショナリズム高揚の一つの大きな契機となったことで、当然、生徒の間でもその影響をうけていたと考えられる。

以下、『校友会雑誌』の題目より日清戦争の期間（1894年から1895年）に掲載された日清戦争関連の主な記事、論文等をあげてみよう（表1）。なお、これらを対象とした分析は、すでに菅井鳳展によってなされている<sup>17</sup>。そこで本稿では、菅井の研究をふまえながら検討しよう。

表1『校友会雑誌』に掲載された主な日清戦争関連

39号「恭誦宣戦及義勇兵詔勅」	1894年10月7日
40号「従軍兵士」（歌）畑田春耕、従軍行（歌）、征清訣別（歌）音楽部員作歌	
41号「征清の軍士を懐ふ」斎藤雄助、「征清軍歌」	
42号「平壤陥落、黄海大戦」樗園、	
44号「戦報を読みて」新見吉治、擬従軍行（和歌）	
47号「雲外機話」空々子	
48号「賀表」久原躬弦	1895年6月20日

『校友会雑誌』には、開戦時に「恭誦宣戦及義勇兵詔勅」（39号）を掲載し、続いて、「従軍兵士」（40号、1894・10・28）、「征清の軍士を懐ふ」「征清軍歌」（41号、1894・11・28）、「平壤陥落、黄海大戦」（42号、1894・12・28）、「戦報を読みて」（44号、1895・2・28）、「従軍所感」「海軍兵学校生を送る詩」（46号、1895・4・22）などが、掲載され、戦争終結時には、「賀表」（48号、1895・6・20）が掲げられている。これらの内容については、いずれも国家を思い「至誠の情溢れ」て、読む者をして「奮起興起」させるものであった<sup>18</sup>。

さらに、ここで論じられている生徒の戦争観を分析した菅井の指摘によれば、彼らは、朝鮮の独立自主を回復するがためという政府の対清国出兵・開戦の名義をほぼそのまま意識しており、戦中・戦後一貫して、戦争の目的は「義戦」であると考えていた。たとえば、生徒の論文をみると、表1にあげた以外にも「嗚呼東西古今宣戦多しと雖も、吾人は未だ嘗て此の如く名の正しく義に順ふものあるを見ざるなり」（40号「批評」、1894・10・28）。「抑も今回の戦争が世界に向かって誇るに足るは、[東洋の平和のために]平和の敵を打撃したが故なり、換言せば義勇の精神と博愛の至情とが跳梁しつゝ事をなしたが為なり」（51号、鶴沢惣市「義勇の精神博愛の至情」1895・11・30）と、述べている。このような認識が、生徒の有していた戦争観であった<sup>19</sup>。そして、戦争勝利の要因としては、まずは「日

本の国体とそれを奉ずる国民精神の賜」ということが強調され、勝利の要因が、「我に[軍艦]吉野あり松島あり」等のほか「種々あるべしと雖」、何にもまして国民が「皇祖皇宗の威霊を信じ、天皇陛下の威徳を仰ぎ奉る心の強かりしに帰せんずんばあらざるなり」<sup>20</sup>というものであった。

こうした論のなかで、菅井は1897年の『校友会雑誌』に掲載された「国家的精神を論ず」石坂音四郎（65号、1897・3・29）の論文をとりあげて、それを当時の一高論壇の標準的な日本国家観としながら、「かなり陳腐な忠君・崇祖等といった観念の頻出から、一高生は、一種の国家有機体説に立った素朴な一というより、粗大な確信的國家主義信奉者ではなかったか」と指摘して、少なくとも、国家・天皇の無条件的な至上性・至高性の主張と距離をおいたところの、「個」に視点をすえた思考の芽生えはこの時期にはまだ見られないと結論づけている<sup>21</sup>。

以上のように、『校友会雑誌』に掲載された内容をみると、日清戦争時における一高では、戦争を契機として国家主義的精神が大きく噴出し、校内では戦争の熱狂で沸いていたととらえることができる。すなわち、繰り返すように、一高生は、国家の方針をそのまま受け入れていたのであった。

ところで、同時にこの時期の『校友会雑誌』でもう一つ注目すべき点として、「英雄・偉人論」の内容を扱ったものが多いことである。それは、「英雄・偉人」を待望し、国を憂う心情を強く表出しながら、国家的精神に害をおよぼすものを激しく糾弾するというものであった<sup>22</sup>。その論としては、たとえば「実業社会」の急速な進展にともない、拝金主義・物質主義の跋扈、奢侈浮華の瀰漫、軽操才子の横行などにより、実に「其極到や眼底国家なく君皇な」といった「道義の潛滅」に陥り、国体の至上性を前提とする没我的な献身・犠牲の精神が蝕まれつつあるというものであった<sup>23</sup>。さらに、当時の政治家の腐敗墮落に慷慨して、強い批判の気持ちを吐露しながら、「理想を有し徳義確かな経世の英雄・偉人」を待望するのである<sup>24</sup>。以下は、『校友会雑誌』に掲載された1892（明治25）年から1899（明治32）年までの主な「英雄・偉人論」を扱った題目である（表2）。

表2『校友会雑誌』に掲載された主な英雄・偉人論

18号	「英雄管見」片山貞次郎	1892年6月27日
20号	「豊臣秀吉」仙石良平	
27号	「徳川家康論」掬月	
34号	「熊沢蕃山」石上山人、「加武児」北溟狂	
36号	「英雄管見」平田徳次郎、「熊沢蕃山」石上山人、「加武児」北溟狂	
45号	「老子を論ず」鶴沢惣一	
48号	「孔孟の政治思想」林増之丞	
49号	「佐久間象山の逸事」みすず刈る山人	
51号	「鄭莊公伝を読む」大橋虎雄	

54号	「読赤徳義人録」天風道人、「省費録及び其時勢」天涯生
55号	「省費録及び其時勢」天涯生
61号	「蘇秦を論して国際的徳義の及ぶ」平田徳次郎
63号	「諸葛孔明論」原信太郎、「松本奎堂」晴耕庵主人
64号	「松本奎堂」晴耕庵主人
65号	「白川楽翁」佐竹義文
71号	「感化論」村山郷太郎、「長岡城墟墮涙の二碑」懐古欽風楼主人、 「英雄崇拜」宮崎勲
72号	「英雄を論じて我大日本帝国の将来を思ふ」井口金介
76号	「英雄とは猫に非ざれば虎の謂乎」井上敏夫、「献身的精神」竹村輯
77号	「大政治家を論じて其素養に及ぶ」宮島次郎
83号	「虞翁と比公—両政治家の素養を論ず」村山郷太郎
91号	「王陽明の知行合一説を論ず」桜井政隆
1899年11月28日	

このような「英雄・偉人論」が、日清戦争をはさむ時期に誌面を賑わすのである。これらの内容に関して、各論文の内容をそれぞれ紹介すれば興味深い、紙幅の関係でその余裕はない<sup>25</sup>。ただし、その内容をすこしだけみると、たとえば「英雄を論じて我大日本帝国の将来を思ふ」井口金介（72号、1897・12・25）によると、生徒の意識は、「嗚呼国家なかるべからざるものは人傑なり」として、国家にとって今こそ英雄・偉人が現れることを期待しているのである。なお、ここで「英雄・偉人」として、とりあげられている人物は、「白川楽翁」（65号～70号、1897・3・29～同年11・15）がそうであるように、いずれも経国・経世の人物であり、私心なき「誠心」、倫理的観念、「身を以て人を率いる」道徳的人格性が、生徒の英雄・偉人観として、重視されたのであった。

ところで、このような英雄・偉人論が盛り上がった背景には、実のところ生徒の意識として「英雄・偉人論」を通して、自らが経世済民の立場で「国家の大任を以て自ら任ずる」ことを願っていたことを意味すると考えられる。すなわち、旧制高校が帝国大学の予備教育機関として、進学が保障された制度的性格のもとで、一高生のエリート意識が、その根底にあり、将来の立身出世を夢みた意識の現れが、こうした英雄・偉人論を欲していたのであろう。たとえば、「感化論」村山郷太郎（71号～73号、1897・12・8～1898・2・9）をみると、その筆者は、人間形成に影響を与える環境として、父母・師友・時世などをあげて、続いて書籍からの感化について、「他日国家の偉人物をもって自ら任ずる吾人は、常に偉人を師とし、偉人を友とし、偉人の書を読み、偉人の風を望みて、勉て其感化中に捲き込まれんことを励まざるべからず。偉人なる哉、偉人なる哉、吾人は如何にしても偉人を忘るべからず」と、述べていることから窺うことができよう<sup>26</sup>。このように、将来の国家を背負って立つという自矜の念を一高生は共通してもっていたのである。

以上のように、日清戦争をはさむこの時期における生徒の思想は、先に引用した『向陵誌』の回顧的講評である「論者は真面目に絶えず国家を憂い」という状況にあり、自らのエリート意識をその内面にふくませながらも、きわめて国家主義的な傾向を有していたのであった。

以上、本稿では、1890年代から1900年代にかけてのわずかな期間であるが一高の『校友会雑誌』に掲載された主な論文等を分析してきた。

この時期、すなわち『校友会雑誌』の創刊時の1890年代は、日本が対外戦争をおこした日清戦争時に重なる。確認したように一高では、戦争を契機として国家主義的精神が大きく噴出し、校内では戦争の熱狂で沸いていた。すなわち、一高生は、国家の方針をそのまま受け入れていたのであった。それと同時に「英雄・偉人論」が『校友会雑誌』の誌面にでることは、森有礼の期待した制度的性格のもとで帝国大学への進学が保障されていた一高生が、将来の国家のエリート候補生として、自らをそのように意識していたことにはかならない。しかも、いまだこの時期の一高生は「反体制的エリート」には至っていない。

ところが、この後、こうした意識に変化があらわれてくる。すなわち、これまでの国家論や英雄論が戒められて、「国家主義的校風」を疑う声もでてくる。さらに、日露戦争勃発のほぼ5ヶ月前の1903（明治36）年には一高生の藤村操の自死に象徴されるように、一高生の中にさまざまな思想的傾向や関心が表れてくる。

今後の研究としては次稿では、1900年代前後にかけて『校友会雑誌』に掲載された「校風論」から、日露戦争時の一高生の意識、すなわち、一高のいわゆる「籠城主義」に対する批判をも含みながら新たな意識が噴出した時期を対象として考察したい。

## 注

- 1 本研究で考察対象とした一高『校友会雑誌』は、1890（明治23）年11月26日に創刊され、1940（昭和15）年12月5日発行の通巻371号まで、7月、8月の夏期休暇を除き原則毎月下旬に発行された。（大正12年度発行の293号・295号の2冊は欠く）（なお、明治30年代からこの原則は崩れはじめている）その後、翌1941（昭和16）年6月20日「護国会雑誌」第1号となり、1944（昭和19）年6月27日発行の同第7号を以て終刊した。この55年間のうち号外として「野球部史附規則」（明治28年2月22日）、「野球部史」（明治36年2月28日）が刊行されたほか、通常号とは別に300号記念として、1926（大正15）年2月1日に『橄欖樹』第1輯、350号記念として、1935（昭和10）年2月1日に同第2輯が刊行された。
- 2 菅井風展「明治後期における第一高等学校学生の思潮」『資本主義と「自由主義」日本近現代史2（岩波書店、1993年）所収。147頁を引用。また、この稿にあたって宮坂広作『旧制高校史の研究』（信山社、2001年）も参照のこと。
- 3 なお、旧制高等学校研究では、寺崎昌男の「相対的な自由を与えられた彼ら（旧制高校生一引用者）が、その中でどのような精神生活を生きたかが中心課題であり、その解明作業を通じて旧制高校研究は近代日本青年教育史研究の一環となりうる」という指摘にあるように学生史、青年形成史、青年教養史等の研究における展開が期待される。寺崎昌男「旧制高校教育研究の視座」、寺崎昌男編『近代日本における知の配分と国民統合』（第一法規出版、1993年）所収、155頁。旧制高校生の「反体制的エリート」としての指摘は、佐藤秀夫・寺崎昌男「明治期の教育改革に関する試論」『教育学研究』（第37巻、第3号）9頁を参照のこと。

- 
- また、寺崎昌男「旧制高等学校史研究の意味と方法について」『旧制高等学校史研究』（旧制高等学校保存会、季刊第20号、1979年）を参照のこと。
- 4 『第一高等学校六十年史』（第一高等学校、昭和14年）206頁。
  - 5 内村の事件に関しては、宮坂広作『旧制高校史の研究』（信山社、2001年）、『第一高等学校自治寮六十年史』（1994年）、小股憲明『明治期における不敬事件の研究』（思文閣、2010年）等を参照のこと。
  - 6 「雑報」『校友会雑誌』第3号、（1891年1月27日）41頁。
  - 7 森有礼が金沢の第四高等中学校の開校式で述べたように高等中学校設置の目的が、「国勢」の担い手、国家の代表者としての「人物精確」、「學術修練」なエリートの養成にあったことは周知の事実である。「第四高等中学校開校式演説」（1887年10月26日）、大久保利謙監修『新修森有礼全集』第2巻（文泉堂書店、1998年）424頁。
  - 8 1892年（明治25）年3月31日。前掲書『第一高等学校六十年史』213頁。
  - 9 『向陵誌』第2巻（1984年、復刻版）10頁。
  - 10 高橋佐門によると、校風とは、「その学校の教育方針というものが先ずあり、而してこれに呼応する学生・生徒の、これを受け容れ、消化して具体化する状態があり、或いはまた学生・生徒の集団の内部に自発的に自分の学校を精神的にある一定の方向に動かそうとの意向が生じ、そうしたものが時を経て熟して一つの精神的特色と力を呈して来る」ことであるとしている。高橋佐門『旧制高等学校全史』（時潮社、1986年）207頁。また、笈田知義は、「高等学校生活についての自覚と反省や高等学校教育についての批判と要求を表わしたもの」としている。笈田知義「高等学校（旧制）教育と寄宿寮について―校風の発生」『人文』（京都大学教養学部、1968年）所収、42頁。
  - 11 菅井鳳展『前掲書』149頁。
  - 12 高田采松「我が第一高等中学校ノ一大欠点」『校友会雑誌』第3号（1891年1月27日）35頁。
  - 13 下村宏「校風を論じて其振興策に及ぶ」『校友会雑誌』第48号（1895年6月20日）14頁。
  - 14 中馬庚「校風と運動家との關係を論じて京都遠征に及ぶ」『校友会雑誌』第34号（1894年2月27日）11-12頁。
  - 15 平林正治「勤儉尚武」『校友会雑誌』第33号（1894年1月27日）9-11頁。高橋佐門『前掲書』164頁を参照のこと。
  - 16 菅井鳳展『前掲書』150頁。
  - 17 菅井鳳展『同前書』。
  - 18 菅井鳳展『同前書』150頁。
  - 19 なお、『校友会雑誌』の内容は、菅井による指摘を引用した。150頁。
  - 20 空々子「雲外機話」『校友会雑誌』第47号（1895年5月23日）、菅井鳳展『同前書』150頁を引用。
  - 21 一高論壇の標準的国家観は、「国家は「高等なる有機体」であり、人間が「肉体と共に無形的心霊を有」しているがごとく、国家も形体（＝組織）と心霊（＝「国民全体の意志精神を綜合して之に命名したるものにあらずして、国家自らの意志精神」とを有している。そして、「有機体たる国家」あってはじめてその各機関（＝個人）の生存が可能となる。したがって、個人の権利自由のごときは「ただ国家的精神の範囲内に於て」のみ許される」としている。菅井鳳展『前掲書』150-151頁。
  - 22 その一つにキリスト教の浸潤があげられる。「西洋精神」の流弊が「日本精神」を損なうものと心配されている。「雲外機話」空々子『校友会雑誌』第47号（1895年5月23日）、菅井鳳展『同前書』152頁を引用。
  - 23 井口金介「英雄を論じて我大日本帝国の将来を思ふ」『校友会雑誌』第72号、（1897年12月25日）、菅井鳳展『同前書』152-153頁を引用。
  - 24 菅井鳳展『同前書』153頁。
  - 25 内容に関しては、すでに菅井鳳展により指摘されているのでそちらを参照。
  - 26 村上郷太郎「感化論」『校友会雑誌』第72号（1897年12月25日）、菅井鳳展「同前書」155頁を参照のこと。